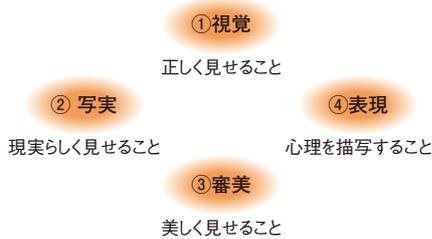


舞台演出照明の考え方

演出照明とは、単なる電気や配光の技術ではなく、光の効果により演劇や催し物を成功させる一つの芸術だといえます。それ故に演出照明家は電気や照明技術家であると同時に光の芸術家としての能力が必要とさ

れています。演出照明を構成する要素は、次の4つが挙げられますが、それらは演出照明の「設計、操作の基準となること」「批判、観賞の対象となること」という言葉に集約されます。

演出照明の4要素



① 視覚

観客が劇場にくる目的は、見ること聞くことであり、舞台がどのような場面であっても、観客にはそれが正しく良く見えなければなりません。そのためには光の量と質が適正になっている必要があります。

●光の量(充分な明るさを得ること)

演出照明の場合、演出により光の量が変化しますので、照度基準なるものは決められておりませんが、どのような催し物にしても良く見えるだけの照明設備が必要となり、一般的に客席中央の視線を基準として最低1,000lx以上が必要です。また多目的ホールなどでTVの公開録画などがある場合は、カラーカメラの感度より考えて2,000lx以上が望ましいと思われます。

●光の質(適当な照度分布、色彩等を考えること)

時に応じて光を巧みに分布し、色光を与えて演出意図を正しく見せることで、たとえば光の方向、角度、パターン、色光の組み合わせ、調光などを考慮します。

② 写実

演劇における写実は、舞台を現実らしく観客に見せるための演出法として重要な要素になります。現代の演劇は、劇場という空間内において演出により自然界のあらゆる事象や現実の生活を観客に示し、観客は舞台上の事象や生活が現実に行われているものように受け取り、写実的效果を一層高めます。

演出照明が写実的に表現できるものとして次のものがあります。

●時

舞台において時を表現する要素として演出照明ほど適切なものではありません。四季の変化や1日中の時間経過などは、演出照明により昼は明るく夜は暗いという単純な場面から、暁方から朝へ、日没から夜へとごく自然に徐々に変化させていく複雑な場面まで、時の変化を自由に表現できます。

●天候

晴れた日、曇天、雨、太陽、月、星、雲、稲妻、雪、虹などいろいろな自然現象の描写も、演出照明はさも現実らしく表現することができます。

●その他、物の描写

鳥や蝶、動く乗物、魚などの水中のもの、炎、煙、花などを描写することができます。このように演出照明は、光の当て方や色光、各種効果器具を使用して舞台を写実的に演出することができます。

③ 審美

夕焼けや月光など、自然の情景を見て美しいと感じるのは、そこに光と影があるからです。舞台においても物に美しさを与えることは必要で、演出により美しく舞台を描写します。例えば俳優の着る衣装や舞台装置などを光の当て方や、適当な色光によって観客に美しく見せます。

④ 表現

演劇は心理的な要素が中心で、感覚的要素を主としたものではありません。照明効果による心理表現は、演出意図を表わす最も重要な要素です。この照明効果、すなわち明るさ、色彩の違いによる感情の表現は、単にフェードイン・フェードアウトなどの調光操作だけでも、観客にさまざまな感情を引き起こさせることがあります。たとえば演劇だけではなく、コンサートにおいても曲のイメージに合わせた照明によって聴衆をより魅了することができます。